図書館だより

No.69　　December, 2006

目　　次

巻頭エッセイ・・・・・・・・・・「本嫌いのための読書術」・・・・・・・・・・（機械工学科）松永　崇・・・・1

読書のすすめ・・・・・・・・・・戦艦大和誕生・・・・・・・・・・・・・・・・（材料工学科）山本　郁・・・・2

想像する事・・・・・・・・・・・・・・・（一般科目・理科）山本　稔・・・・3

本に関する私の思い出と読書のすすめ・・・（生物応用化学科）野坂　通子・・・・4

私の一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（各学科学生）　6名・・・・6

リレー連載・・・・・・・・・・教科書を読む・・・・・・・・・・・・・・（一般科目・文科）小宮　厚・・・・7

写真館（ブックハンティング）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

投稿 ―<読書のすすめ>―・・・テレビのないライフスタイル・・・・・・・（　校長　）前田　三男・・・・9

平成１８年度前期 図書館利用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

Information・・12

編集後記・・12

Kurume National College of Technology Library

久留米工業高等専門学校図書館

巻頭エッセイ

「本嫌いのための読書術」

機械工学科　松永　崇

現在は、テレビ、ビデオ、ゲームなど読書以外の楽しい娯楽がたくさん登場し、活字離れが危惧され、活字文化の復興が叫ばれている。２００１年には子供の読書活動推進法が制定され、地域での絵本の読み聞かせ、家庭でのブックスタート、小中高校での朝の読書運動、大学での読書マラソンなど、教育現場では読書に関わる取り組みが強化されている。しかしながら、若い人は、活字離れというよりも、活字に触れる場面は増えていると思われる。例えば、動画のコンテンツも増えているとはいえ、インターネットユーザーが画面に向かっている時間のほとんどは、文字との接触である。特に、近年広がりを見せているメールやブログ（公開型の日記）は、活字による情報伝達や表現をしたいということの現れでもある。また、生活必需品となった携帯電話やパソコンで小説が読めるようになってきた。このような新しい読書スタイルも定着しつつある。テレビや映画は、ビジュアルに人が出てきて、自分がその世界にすんなり入っていくというおもしろさがあるが、本の場合は自分で想像して、その世界に参加しなくてはいけません。本は活字しかないので情報量がとても少なく、「主人公の身長はこのくらいで、こういう服を着て、性格はこうで」と想像しながら読んでいく。自分の想像で世界を作り上げ、今までにしたことのない対話や行動を経験することができるおもしろさがある。足で行ける場所には限りがあるが、頭の中では無限の世界に飛んでいくことができるからです。ゲームや映画ではなかなか味わえないおもしろさです。

さて、「本の読み方」については、さまざまな意見がある。例えば、一人の作家を中心に読む。また自分のテーマを決めて読む。さらに一冊ずつきちんと読み重ねる。反対に何冊も同時並行で読む。古典を中心に読む。自分の興味あるものから読む。良書をゆっくり、ていねいに精読する。多くの本を速読する、など。そして、読んだら短くても感想を書いたり、人に語ることを勧める人もいる。そうすれば、内容をより深く自分のものにすることができるからだ。

他にも「読書の方法」については、いろいろな考え方がある。しかし、必ずしも“こうでなければならない”というものはないと思う。自分に合った読み方でよいし、自由に伸び伸びと「読書の習慣」をつけていけばよいのではないか。ともかく、若い時代に良書に触れ、その中から「自分の友達だ」、「少年時代の親友だ」と呼べる書物や登場人物を見つけることが大事である。胸の中に、そうした“心の友”が生きている人は幸福であり、人生が豊かになるし、楽しい。また、いざというときに強いし、人格にも味わいが出てくる。例えば、優れた外国の本の登場人物と対話を交わし“友達”になる。そうすれば、その国の「心」を深く知った人ともいえる。また、世界中の人々に通じる普遍的な「人間性」を磨いたことにもなる。その人は、単に語学力を鼻にかけただけの傲慢な人になるより、よほど“心の国際人”であるといえまいか。もちろん語学力は絶対に必要であるが、大事なことは語学を身につけながら、同時にその国の人の考え方を知り、心を学んでいくことである。すなわち、読書は自分自身の中にある英知を磨くものであり、充実した、また晴れ晴れとした心の世界を開くものである。ゆえに、いくらたくさんの知識を持っていても、謙虚に自分の“内なる世界”を見つめない人は、真の読書の人とはいえないのではないか。我が“内なる光”を発見するための精神の航海。我が“内なる宇宙”への旅、それが読書なのであるといえまいか。

わかりやすくするために、別の例えとして、こんな昔話がある。

父の遺言で「あの荒れ地の中に宝がある」と息子たちが聞いた。怠け者の息子たちだったが、“宝”が欲しいばかりに、毎日一生懸命荒れ地を掘った。人間は宝物に弱いらしい。なかなか宝は出ない。しかし、まじめな父の言うことである。どこかにあるはずだ。こうして一年たった。いつの間にか荒れ地は立派に耕されていた。ある人がそれを見て「こんなに見事に耕された土地なんて、ほかにはない。どんな作物でもできるだろう。すごい財産だ」とほめた。息子たちは初めて悟った。父親は自分たちに「労働」という“宝”を教え、土地を耕させるために、財宝の話をしたのだと。父の話はうそではなかった。探していた宝は、まさに“土の中”にあったのだ。父の心がわかった息子たちは感謝しつつ、以来、いつまでも仲良く栄えた、という物語である。

写真：教員室にて

この話からは、さまざまな教訓が引き出せる。読書についていえば、“読む”ことも「心を耕すクワ」といえる。実は、本そのものの中に知恵や幸福があるわけではない。本来それらは全部自分の中にある。宝物は、私たちの頭と心の中にあるのです。しかし、読書というクワで自分の心、頭脳、生命を耕してこそ、それらは芽を出し始める。「文化」すなわち「カルチャー(culture)」の語は「耕す」、すなわち「カルチベイト(cultivate)」からきていることは有名である。自分を耕し、自分を豊かに変えていく。そこに「文化」の基本がある。ともあれ、あらゆる賢人が読書を勧めている。人生の“実りの秋”に大きな大きな精神の果実をつけるために、今こそあらゆる良書に“挑戦また挑戦”していきたい。

特集 読書のすすめ

戦艦大和誕生

材料工学科　山本　郁

数年前、たまたま模型店で戦艦大和のプラモデルを見つけ、購入後製作する際、制作時の参考に、この「戦艦大和誕生」の本を手に取った。

この本は、その当時世界最大級と言われた戦艦大和の建造に携わった日本海軍技術大佐 西島亮二氏をはじめとする造船技術者達の話である。

この大和の建造が計画されたのは昭和８年のことである。その理念として他国の追随を許さぬ卓越した戦艦を建造するというもので、巨大な火力を持ち、速力も優れ、撃沈しがたい船を造ることであった。実際に建造された場所は広島県呉市の呉海軍工廠であった。この工場の技術者や行員達は「腕も技術も日本一」と自負しており、一番最初にこの船を造ることが出来ることは大変名誉なことと誇りに思っていた。その反面、失敗の許されないこの重大任務を無事に果たせるか不安を抱えていたそうである。これまで建造した船の二倍の大きさかつ非常に複雑な船を建造しようとするなかで、実際に完璧な設計図面があっても、本当に計画通り作れるのか、求められた性能が発揮できるのかという不安は想像できる。大和建造の成功には、技術者達のこの大き

なプロジェクトを絶対にやり遂げようという強い志、技術的な面では、電気溶接を用いた工法、新材料の開発、ブロック建造法や早期艤装など新しい技術の開発の成功だけではなく、徹底的な生産管理、材料や部品の標準化、規格化などの地道な努力、綿密な計画があったからこそと考えられる。その当時のことを、ある技術者は「およそ計算できるものは全て計算し、実験できるものは全て実験し、造船技術者としてなすべきことは全てした。」と話していたそうである。西島氏は、生産管理を行うにあたって、工員に対しては非常に厳しかったが、自分が知らないことについては素直に現場の提案にはよく耳を傾け、プラスになることは率先して取り入れる人であった。

４年の歳月をかけて建造され、実際に大和が完成したのは太平洋戦争が始まった１週間後の昭和16年12月16日であったが、計画当時とは情勢が変化しすぎてその後は十分に活用されていない。昭和20年、大和に下った最後の命令は最近映画にもなった沖縄戦への出動であった。建造に携わった西島氏は大和を訪れ、乗艦する先輩と別れの杯を交わしたそうである。自分が造った船の運命は分かっており、技術者としての無力さを思うと心が痛む。

この状況のさなか、彼らは次世代の技術者のために何が出来るかを考え、勉強会を開きながら生産技術の伝承を行っていった。戦後、技術者魂は受け継がれ、その当時確立された管理方法や造船技術は十分生かされ、現在に至っている。日本の造船業の成功について書かれた米国の論文においても、「成功の秘密は日本独自の生産管理方式であり、西島氏が独力で開発したものだ。これは、他国も大きく学ぶべきものである。」と非常に高い評価をしている。その伝承が、現在の生産大国、経済大国の基盤となっている。

時代や作るものが変化しても、世界最高のものを作ろうという技術者の「物作りに対する情熱と地道な努力」は変わらないと言える。先人の技術者魂を改めて痛感した。過去の出来事を知ることにより、これからの参考になると考えられる。本との出会いは、まさに、人との出会いのようである。世の中には「感動」といった心を動かしてくれるものや、人生観を変えるものといった多くの素晴らしい本がある。皆さんも心に残る「書」に触れる時間を少しでも見つけてほしい。

残念ながら、私が建造中であった大和は、未だ未完成のまま押入れの中に眠っている。

特集 読書のすすめ

想像する事

一般科目・理科　山本　稔

白状しますと、この原稿を執筆する事が決まってから、今回紹介する本を読み始めました。以前から読もう読もうと思っていた本をこれ幸いとばかりに読み出した訳です。「読書のすすめ」というタイトルにふさわしくない読書態度ですがご容赦下さい。

私たちはノートや黒板に曲線や平面図形をかいて調べる事が出来ます。さらにかき方を工夫すれば、3次元空間内の1次元、2次元図形をかく事が出来ますね。これは私達が3次元の世界に住んでいるからです（注1）。では、4次元、5次元空間や、その中に存在する3次元、4次元図形といった高次元の世界はどの様にして考えれば良いのでしょうか。「ノートにかけないから」「私達の生活には関係してないから」と言った理由で高次元の世界を想像する事をやめてしまうのはもったいない話です。

この、「高次元の世界を如何にして想像するか」という問に対する１つのヒントが今回紹介する本、アボット著「多次元☆平面国…ペチャンコ世界の住人たち」（東

京図書）です。この本はフラットランド（平面国）の住人であるスクエア（正方形）氏が彼の住んでいる平面の世界を紹介する形で物語は進みます。フラットランドの生活は私たちには一瞬理解しづらいかもしれません。しかし例えば床に寝転がって床の上の物を実際に観察する事で、フラットランドでの生活を擬似体験する事が出来ます。

では、フラットランドの住人であるスクエア氏は私達の３次元の世界をどの様にして捉えるのでしょうか。私達が当たり前に感じている「高さ」方向がスクエア氏たちにとっては受け入れ難い感覚であり、これは私達が「縦、横、高さ」とは別の方向を受け入れ難いのと同じ現象が起こっている訳です。物語の中ではスクエア氏は幸運にも2次元球面の訪問を受け、0次元、１次元、3次元の世界を垣間見る事で「高さ」の存在を理解し、さらには4次元以上の高次元世界の存在も頭の中で想像する事により理解しました。残念ながら私達は4次元世界の住人の訪問を受けていません。しかしスクエア氏が行った思考実験をたどる事で私達も４次元、５次元、６次元…と無限に続いてゆく高次元の世界を想像する事が可能になるのです。

ここまで偉そうに４次元だの、５次元だの言ってきましたが、私自身も高次元の空間や図形を未だうまく想像する事は出来ませんし、よく解かってもいません。バーチャルリアリティの技術が進展して、３次元空間に図形をかく事が出来るようになれば、４次元ももう少し理解出来る様になるのかもしれません。ですが前述した様に、私達の世界やフラットランドの世界を（擬似）体験し、思考実験を行う事によって、高次元の世界が絵空事ではなく実在感を持ち、確かに存在するものとなります。目に見えるだけ物や現実世界の制約から解き放たれ、次元を自由に行き来出来る様になる事は愉快な事ではないですか。さらにフラットランドや高次元の世界を旅行するのにお金はいりません。必要なのは深く沈潜して、想像力を働かせ、自分の中の感覚を育てる行為、それだけなのです。何と素敵な事ではないですか！

最後に今回紹介した本の本文と訳者あとがきの中から一文ずつ引用しましょう。本文からは「“考え”の多様であることを、創造力の一例であると自慢しているのです。」という箇所、あとがきからは「アインシュタインは『想像力は知識よりも重要である』と言っていますが、（中略）アボットの想像力のすばらしさに驚くばかりです。」という箇所です。前者は含蓄に富んだ警句、後者は私達に勇気を与えてくれると思いませんか？

（注１）最新の物理学ではこの宇宙は１１次元と考えると良い様です。さらに言えば私たちの生活を記述するには無限個のパラメータが必要で、それらの間に「風が吹けば桶屋が儲かる」といった関係式が入っていると捉えても良いですね。

（注２）今回紹介した本に興味を持った方はさらにブルガー著「多次元☆球面国」（東京図書）とスチュアート著「２次元より平らな世界」（早川書房）を読まれる事をお勧めします。後者の本によると、21 世紀末にはフラットランドもインターネットならぬインターラインで情報を得る事が出来るそうです。フラットランドの生活の変化も見逃せませんね。

特集 読書のすすめ

本に関する私の思い出と読書のすすめ

生物応用化学科　野坂　通子

今回、皆さんに読書を勧める文章を書かせて頂く事になりましたが、恥ずかしい事に、私はあまり本を読んでいません。従って、多くの本を読んで自然に養われる深い教養と格調高い文章は期待できません。然しなが

ら、私も読書の大切さは実感しています。

本に関する事で昔を振り返ると、まず小学生の低学年では教室にある本を授業にお構いなく読んでいたようです。その時に先生は気付いておられたのですが、その時は注意せずに通信簿で諭してあり、それを母から伝えて貰いました。母親は怒るのではなく、まず良い所を読んでくれて、それからニコニコしてこの事を言ってくれた事を覚えています。その時の私は幸せでした。翻って今の自分を見ると、大人として彼女を見習わなくてはいけないなと思います。さて、5-6年生の頃は、主に推理小説を図書館から借りて、ある程度の量を読んでいました。この頃は、好奇心と話やトリックの面白さに釣られて読んでいただけですが、まだ見た事のない外国の町の風景を想像したり、外国の人々の考え方にも触れたりしていた様に思います。（勿論、日本の本を読んで大人達の考え方も学んでいたと思います。）中学生では、国語の基礎と漢文古文等に触れ、暗記させられたりして多くを学ぶ事が出来ましたが、本を読む事からは少し遠のいていたようです。高校生の時に国語の論理、文法などは何とかなるが、詩や歌などの情緒や感情を昇華したものを理解するのが難しいと感じていました。幸運な事に、その時期私が教えて頂いた先生方の中に、本物と思える国語の先生がおられました。自分にはどうもピンと来ないのだけれど、その先生は、詩歌を余韻のある間で詠み、本当にそれらを理解して味わっておられる事が判りました。そこで初めて自分の弱点を相談したのを覚えています。先生の答えは、何故か思い出せないのですが、それから暫くして少しは味わえる様になったと記憶しています。その頃から、もっと読書をして、教養を高めたいと強く思いました。芥川龍之介の小説を読んで、精神状態に大きく影響された事もありますが、彼の作品は私には毒だと感じて避ける様になりました。一方、夏目漱石の「私の個人主義」にはとても共感を覚え、明治の文豪の作品に興味を持ちました。少々偏屈な所はありますが、森鴎外と共に尊敬しています。この時期に、本を読むことで、間接的ではあるが、尊敬できる多くの人格と才能に出会うことが出来ると実感しました。大学に入ってからは、哲学書なども幾らか読みましたが、文章が難解で挫折しました。

読書に親しんでおられる人には釈迦に説法だと思いますが、本を読んでおられない皆さんに宣伝します。一般に良書と言われるものは、本当に心の栄養になり、自分を啓発してくれるものです。素晴らしい考え方や現実の捉え方があり、自分だけでは到底到達できない所まで連れて行ってくれると思います。考えてみてください。本を読むだけで過去から現在までの、感性や考え方や生き方が優れた個性豊かな人々に触れることが出来るのです！本という人類の宝に触れ、自分なりに受け止めて、自分を成長させる事ができます。皆さんはもっともっと素敵になれるのです。

優れた本がこんなに素晴らしいものであるのはわかっているけれど、良い本を探すのにも時間が掛かるし、文字を読むのが面倒だと感じている人もいるでしょうね。毎日が忙しいと感じているのでしょう。今の私もその一人に入ります。しかし、得られるものを考えたら、皆さんより先の短い私でも、もっと本を読もうと思います。お金を得るために時間を使うよりも、自分を成長させるための時間を大事にしてください。

最後に、現実的な問題で私が心配だと思う点を一つ付け加えたいと思います。テレビや携帯電話は、便利で快適に暮らすのに必要ですが、これらに慣れすぎた生活をしていると、人が本来持っている言語に関する能力、認識能力、想像力、一つの事を深く考える・味わう力などの一部が退行する事を認識してください。これは、私自身についても当てはまると感じる事ですが、子供の頃からその様な状況にある場合は、深刻な影響が出るのではないかと危惧しています。一人になって自分の内面と向き合うための、ゆっくりした時が流れる時間帯のある生活をするのが何よりですが、これは現代では意識しないと出来ません。テレビを見たり、携帯で長電話をしたりする時間を少し削って読書に充てませんか？そんな事位既にしている？これは失礼！私も通勤途中で見かける読書家の人々を見習い、もっといろいろな本を読もうと思います。

皆さんに　　Good Luck!

私の一冊

樋口　裕一著

頭がいい人、悪い人の〈言い訳〉術

PHP研究所

人間は誰しも失敗をします。例えば、約束破ること、期待を裏切ること、口がすべることなど様々です。そんな時、言い訳ひとつで、ピンチを乗り切る人、墓穴を掘ってしまう人がいます。その差はどこにあるのでしょうか?この本では、ビジネスから恋愛まで世の中にあふれている言い訳の実例を挙げて、傾向と対策を練っています。

「その場しのぎのウソ」「笑いでごまかす」「体調のせいにする」「昔は出来た、と見栄を張る」「聞いてない、ととぼける」・・・。“またか”と呆れる、あの人の言い訳パターンがあるはずです。自分にも身に覚えがあるような・・・。

（機械工学科５年　緒方　智博）

アーサー・C・クラーク著　　伊藤典夫訳

2000年宇宙の旅／決定版

早川書房

SFの大御所、ACクラークの代表作「宇宙の旅」シリーズの第1巻。映画にもなっているので、まずは映画を見るか、あらすじだけをチェックしてから読むと、SF文庫がはじめての人でも気軽に読めます。とくに2010年の映画は一見の価値ありです。2001年の方が有名なのであまり知られていませんが、とても演出に動きがあるので私としては2001年よりも好きです。映画はさておき、SFの醍醐味が小説には所々にちりばめられています。本格的なSFを求める方にもおすすめです。

全シリーズ5巻を読み終わるころにはあなたもSFのおもしろさにどっぷりと浸っているでしょう。

（制御情報工学科3年　真崎　浩）

松山　善三著

名もなく貧しく美しく

主婦と生活社

このお話の舞台は、戦中戦後の日本です。全ての人に様々な困難が押し寄せた激動の時代、主人公である聾者の秋子にも例外なく数々の困難が襲いかかります。「ワタシハ　ツヨイ　ワタシニ　ナリタイデス」困難に傷付きながらも彼女は・・・。貧しくも健気にたくましく、そんなお話です。

このお話を読んで私は、読んでいた場所が図書館であった事、一人で読まなかった事を後悔しました。だから、これからこの本を読もうと思っている人にアドバイスします。一人になれる明るい所で、窓を開けて読むべし。そんな一冊でした。

（生物応用化学科５年　國友　泰）

司馬　遼太郎著

司馬遼太郎が考えること 14
二十一世紀に生きる君たちへ

教科書：小学国語6

「君たちの未来が、真夏の太陽のようにかがやいているように感じた。」

よくあるようなこの表現に、私は、司馬遼太郎さんの思いと、私たちの明るい未来を感じました。

この「二十一世紀に生きる君たちへ」は、小学校の国語の教科書用に書かれたエッセイです。淡々とした語調の中で、司馬遼太郎さんは、これからを生きる私たちに向けた希望、そして、未来への希望を語りかけてきます。また、一つ一つの言葉がやさしく感じられ、素直に受け入れることができます。

何気なく過ごしている毎日が少し変わり、明るく生きていくことができるような一冊だと思います。

（電気電子工学科5年　嶋田　拓磨）

物質・材料研究機構粒子アセンブル研究会　編
粒子集積化技術の世界
次世代材料とデバイスへのアプローチ
工業調査会

この本は、現在注目されている技術の一つである粒子集積化技術をわかりやすく解説してある本です。粒子集積化技術とは、粒子を３次元的に配列させることで、新たな機能を持つ材料やデバイスを開発する技術のことです。今はまだ研究段階で一部を除いては実用化には至っていませんが、この技術が確立されれば光回路の小型化や多機能な材料を作製することができるそうです。

私たち技術者の卵がこういった本を読み、科学技術の今を知ることはとても重要であると思います。なぜならそこから先は私たちが作っていかなければならないからです。私はこの本を読み、そういった気持ちに駆られました。

（材料工学科５年　吉村　浩一）

ジェフ・ホーキンス、サンドラ・ブレイクスリー著
伊藤文英訳
考える脳　考えるコンピューター
ランダムハウス講談社

著者は“知能”を機械として実現することを目指している。まず、従来の人工知能やニューラルネットの問題を「100 ステップの法則」などでわかりやすく説明してくれる。その後、“知能”とは脳の“新皮質”の働きであり、“記憶による予測の枠組み”というシステムであると定義し、その理論や将来性、倫理的な問題まで話が展開される。

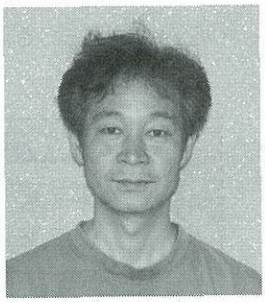
日本の研究者の目標はどうしても「鉄腕アトム」になってしまう節がある。しかし、著者の目標は“知能”であり、その立ち位置がとてもよく思える。

また、「私は脳に惚れている」と言う著者のあとがきの最後の文はニヤリとさせられる名文句だろう。

（機械・電気システム工学専攻１年　萩尾和也）

リレー連載

教科書を読む



一般科目・文科　小　宮　厚

今回の私の文章は、お読みくださる方にとっては、紙上授業参観とでもいったらよいものです。では始めます。

龍村仁の「“私”から“我々”へ」（三省堂、『国語Ⅰ』）は、宇宙飛行士のとても感動的で重要な体験を紹介している。アポロ九号の乗組員、ラッセル・シュワイカートは事故によって五分間、一人船外の宇宙空間に置かれた。突然の静寂の訪れ。生まれたままの素裸で、たった一人で宇宙の闇に漂っている。そんな気がした。眼下には、真っ青に輝く美しい地球が広がっている。と、一気に、熱い奔流のようなものが、体の隅々にまで満ちあふれた。「今、ここにいるのは、“私”であって“私”でなく、すべての生きとし生ける者としての“我々”なんだ。それも、今、この瞬間に、眼下に広がる、青い地球に生きるすべての生命、過去に生きたすべての生命、そして、これから生まれてくるであろうすべての生命を含んだ“我々”なんだ。」静かだが、熱い確信が彼の心の中に生まれていた。

龍村の文章は宇宙飛行士の体験を伝えたここまではいいと思う。しかし龍村は自分の見解を述べて「“私”という個体意識から、“我々”という『地球意識』への脱皮は、…“私”の身体に素直に問い直してみることによって、だれでもが思い出せることだ、と私は思っている。」と結論づける。これはいただけない。これを、自分の飢餓の体験を語るひとが、それを聞く者に身心の飢えのすさまじさを十分に想像させることばづかいでありながら、“飢えを離れた今はもう、自分は飢えの本当のことを語ることはできないのだ”と言う言葉と比べると、どうであろうか。シュワイカートの体験は単なる意識ではないはず

である。

空疎なことばにこころは疲れるが、良質のことばはその感触や味わいが、心の内に住まって心を養い育ててくれる。長田弘に「微笑について」(筑摩書房、『精選現代文』)という文章がある。

「そこに微笑がのこされていると感じられる風景があります。そのような風景のなかに身を置くとき、いま、ここにあるという感覚に、じぶんが深くひたされてゆくと思う。…一個の感受性の容器としての一人のじぶんというものを、いま、ここに確かにしてゆく…そこに人間がいると確かに感じられる風景というのは、ものみなが静かに笑っているような風景が、そうではないだろうか。わたしはそう思うのです。」

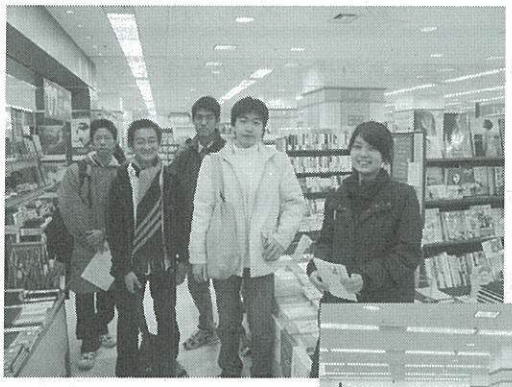
「いま、ここにある」「深くひたされてゆく」「いま、ここに確かにしてゆく」「そこに人間がいると確かに感じられる」、たたみかけられる実在感。この場合、ことばが実在感を作り出すというよりは、経験の事実がことばを求め、選びとっているというべきであろう。

ところで、長田弘は、「一個の感受性としての一人のじぶんというものを、いま、ここに確かにしてゆく」というが、ここで確認されなければならないのは、ここの「じぶん」は物のような客観的存在ではなく、「微笑のある風景が、じぶんを確かにしてゆく」といわれる、「じぶん」だということである。そして、ここに結実する、「確かさ」は、“一個の”、“一人の”、“じぶん”、“いま”、“ここに”、と掛け替えなく具体的に現在する以外に無いものなのである。となると、少々飛躍するが、我々が日常体験する現実は、我々に客体として存在するのではなく、じぶんに現実化することであるということになりはしないか。

最後に森有正の「感覚のめざめ」についての考えを紹介しておこう。長田弘の思いと通じるものがあると思われるからである。

「ある人があるお嬢さんに対して恋愛をして、…ごちそうしたり、いろんな贈りものをしたり、一緒に散歩したりする。そのとき、そのお嬢さんは、その人にとって、ほんとうにその人の相手になっているわけです。そういうときに初めて、そのお嬢さんの美しさに対して、その人の感覚が目ざめている、あるいは目ざめてくるのです。」(『生きることと考えること』)

下の写真は、12月4日(月)、QUESTでのブックハンティングの様子です。
来年度も予定してます。興味ある方は、アナウンスにご注意下さい。



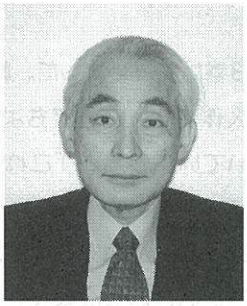
参加して下さった
学生の皆さん。

自分で選んだ本が、
図書館に並ぶ。
それが
「ブックハンティング」
(Book Hunting)
です。

ブックハンティングでは、
自分が読んでみたい本を、
その場で選んで購入します。

投稿 ―<読書のすすめ>―

テレビのないライフスタイル



校長 前田 三男

我が家には昔からテレビジョンがありません。ずっとそういう生活をしてきたので、普段はテレビがないことを意識したことがありませんが、人と話しているときに「実はうちにはテレビがないので」と言って相手にびっくりされたりすると、「我が家はよそとずいぶん違うんだな」と意識してしまいます。子供たちは小中学生の頃、「うちにテレビがないのは貧乏なせいだ」と信じていたようです。友達との間で TV 番組のことが話題になると、見たようなふりをして、話題を合わせるのに苦労したと言っています。

家にテレビを置かなかったのは、テレビの害悪がどうのこうのといった積極的な主義・主張が私にあったためではありません。それに、14 年ほど前からは、ビデオの映写装置に関しては最高級のものが備え付けられています。しかし、それで見るのは市販されている映画のビデオソースか、私自身が作った映画に限られていて、TV 番組は一切見ませんから、未だに NHK には受信料を払ったことがありません。TV の画一的なプログラムと、それを一方的に受信者に押しつけてくるところが、どうも私の性にあわないのかもしれません。

最近では大画面のディスプレイが流行し、家庭でも 50 インチぐらいの TV を備え付けている人がいるかもしれませんが、我が家には 14 年前に 120 インチのワイドスクリーンが導入されました。このサイズのスクリーンを、日本家庭のスタンダードな８畳サイズの居間に持ち込むのは無理です。今から 20 年ほど前、一戸建てのマイホームを建てるとき、妻と私の念願は、家庭にお客さんを呼んで小さなコンサートができるスペースを確保することでした。何しろ狭い敷地なので、他のいろいろなスペースを犠牲にするしかなかったのですが、ともかくも吹き抜けで天井が高く、椅子を並べると最大 40 人ぐらいが収容できる「特大の居間」ができあがり、今でも時々演奏家を呼んでホームコンサート兼パーティを開いています。

その上、私は以前からオーディオに凝っていて、音響設備は万全でしたので、この居間を「ホームシアター化」するのは容易でした。とはいえ、その当時のプロジェクターはまだブラウン管時代でした。この 10 年ほどの間の液晶プロジェクターの進歩はめまぐるしいもので、実に４回も買い換えました。フロントプロジェクターはかなり値が張るものなので、そのたびに妻を説得するのに苦労しました。人より早くこういうものを導入するのは、かくのごとく苦労が多いものですが、それ以来我が家ではパーティをする毎に、お客さんに映画を見せるのが慣例になり、そのたびに大いに自慢しましたので、すでに「モトはとった」感じです。

その装置を導入してから数年間は、暇があれば夕食後は映画を見るのが習慣になりました。私も学生時代にはかなり映画をよく見た方ですが、その後は世間並み、それがここに来て突然映画マニアになってしまったわけです。歳をとってから見た映画はすぐ忘れてしまうものです。それで、最初は見た映画の感想をメモしていたのですが、そのうちに他の人にも読んでもらいたくなり、ちゃんと印刷製本して知人に配るようになりました。その本のタイトルが「AV シネマ千夜一夜」、つまり「千本の映画を見ます」と宣言してしまったわけです。今ならブログにでも投稿するのが手っ取り早い方法かもしれません。とにかく他人が作った映画の批評を公表するとなると、相当慎重になりますし、真剣に見るようになります。私は大急ぎで映画史や映画理論の勉強をはじめ、この時期には積み上げると４メートル分ぐらいの映画の本を読みました。

そういうことで、７年間をかけて「AV シネマ千夜一夜」

全３巻は完成しました。原稿用紙にすると約 4000 枚もの大作です。自分でもよく書いたものだと思いますが、書いているうちに「これは映画の批評というより、映画を通して自分自身を語っているのだ」と気づきました。当時 50 歳代後半の私は、このあたりで人生を振り返ってみたいという欲求が内部にたまっていたのかもしれません。私の青春時代にあたる 1960 年代後半は、フランスのヌーベルバーグやアメリカン・ニュー・シネマと呼ばれる新しい潮流が台頭し、映画は大きな変革期でした。しかし私はそういった映画よりは、1930 年から 50 年代にかけて、映画が大衆の最大の娯楽だった時代のおおらかな作品に出会えたのが、最大の収穫だったと思っています。

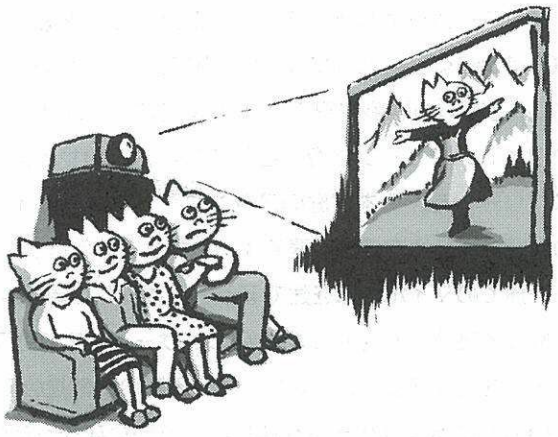
「AV シネマ千夜一夜」はあまりに大部なので、還暦記念に「AV シネマ千夜一夜ハイライト」という縮小版を自費出版しました。この本は高専の図書館にも寄贈していますから、興味があれば読んでください。半分は映画の話、あとの半分はその他の趣味に関するエッセイです。

電通の調査によれば、日本の家庭では平均して８時間も TV のスイッチが入っているのだそうです。これはたいへんな時間で、たしかに家庭にテレビがあるかないかは、その人のライフスタイルを左右しているのかもしれません。テレビが我々に押しつけてくる情報は膨大なものですが、多くの人はそういう日常の映像にならされてしまって、大部分頭の中を無感動に素通りさせているのではないでしょうか。映画館では誰でももっと真剣に映画を見ます。映画が終わったら自分も映画のヒーローになって、ちょっと肩を怒らせて口笛でも吹きたい気分になる … それが映画を見る醍醐味だと思うのですが、ＴＶやビデオによる映画鑑賞でそんな気分にならないのはなぜでしょう。もちろん、スクリーンの大きさとか、画質の問題がありますが、最近のホームシアターのクォリティは映画館に比べてそれほど遜色がありません。そうすると残るのは見る人の神経集中度の問題になります。

最近の高輝度プロジェクターでも、いい画質で見るには部屋を真っ暗にした方がいいようです。これは映画館同様、精神を集中させるのに有効です。「アニー・ホール（1977）」という映画で、映画館に遅れて着いたウッディ・アレンが「映画は最初から見なくちゃ、いやだ」とダダをこねるシーンがありますが、私も映画は絶対に最初のタイトルから終わり（最近の映画のエンドクレジットは長すぎるので閉口していますが）まで見ないと気が済みません。途中にコマーシャルがはいるなどもってのほかです。それが作者に対する礼儀だと思います。それだけ真剣に見ると、見終わったときつまらない映画だと失望が大きいので、事前の選択も厳しくなります。

さて、この文章は「読書のすすめ」となっているので、最後にテレビがない家庭で我が一家の読書が進んだかどうかに触れる必要があるかもしれません。私が読書（ことに文学書）に熱中したのは学生時代で、この期間は一時神経衰弱になるほど読みました。しかし、そのあとはまあまあで、テレビを見ない時間は上記のように他の趣味に当ててきた感じです。これは妻も同じで、どう見てもテレビがないからといって読書家になったとは思えません。

それに対して二人の娘たちは、この世代にしては相当の読書家になったようです。漫画本の比率がかなりを占めてはいるものの、意外に難しい本も読んでいます。少し前の話になりますが、「失楽園」という不倫小説がはやっていた頃、東京の娘のアパートで枕元に文庫本の「失楽園」が転がっていたので、「なんだ、こんな本を読んでいるの」とめくってみたら、ミルトンの「失楽園」だったので「おっ！」と思った経験があります。特に美大に進んだ上の娘がエディトリアルデザインを専攻し、今では出版社に勤めて雑誌のデザイナーになっているのは、小さい頃から本に親しんだせいだったかもしれません。



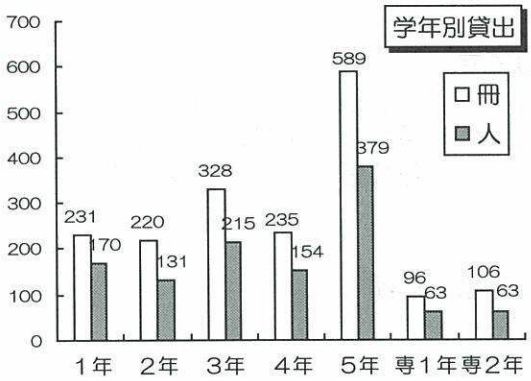
イラスト：こんな風な猫のイラストは、知る人ぞ知る、もう 30 年近くも私が描き続けてきたキャラクターです。

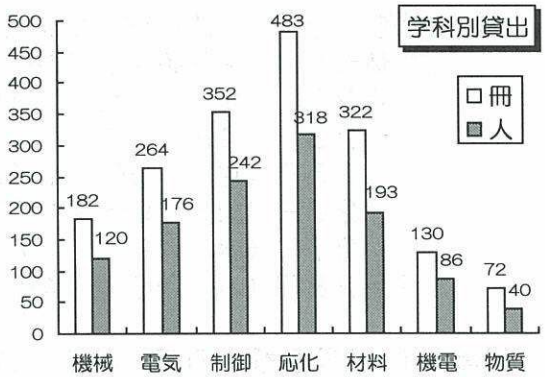
平成１８年度前期　図書館利用状況

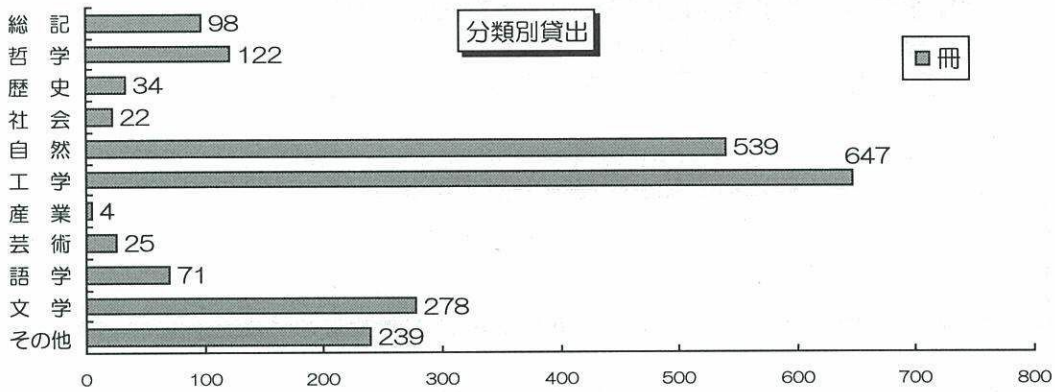
◆開館日数及び入館者数

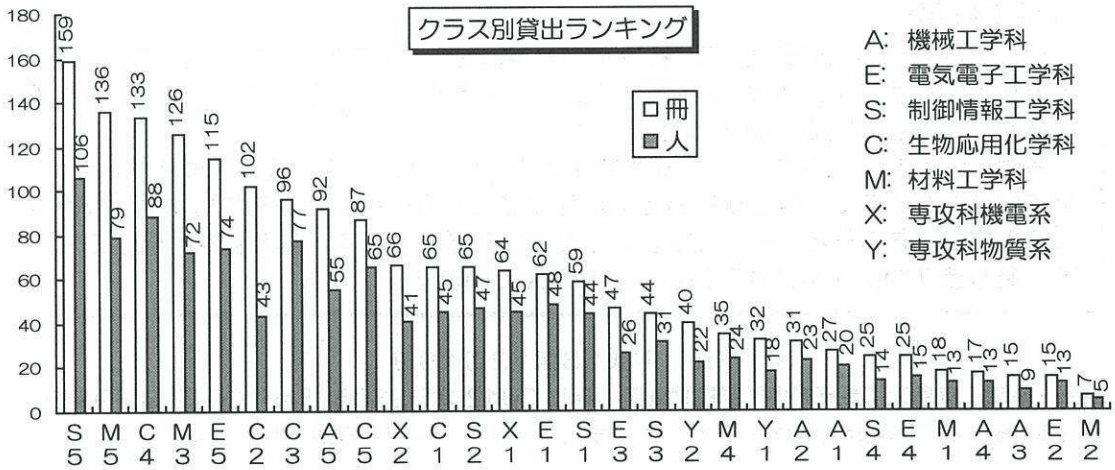
月	開館日数	入館者数 平日 時間内	入館者数 平日 時間外	入館者数 土曜日	入館者数 合計	一般利用者数（内数）	一日平均入館者数（四捨五入）	
4	22	2,614	403	56	3,073	30	140	
5	24	3,814	954	122	4,890	30	204	
6	26	3,782	724	177	4,683	39	180	
7	23	2,697	379	140	3,216	23	140	
8	19	2,050	0	0	2,050	27	108	8月は休業期間中につき時間外開館なし
9	24	3,569	706	328	4,603	27	192	
合計	138	18,526	3,166	823	22,515	176	163	

◆図書貸出状況









Information

下記のとおりお知らせいたします。開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。

特別（長期）貸出について

冬季休業中の特別（長期）貸出を下記のとおり行います。

貸出期間：１２月１５日（金）から
　　１２月２７日（水）まで

返却期限：　１月　９日（火）

貸出冊数：５冊以内

一般利用者及び教職員は従来どおりです。

開館時間の変更及び休館日について

冬季休業及び年末年始は下記のとおりです。

１２月２２日（金）	９時～２０時	１月５日（金）	９時～１７時
２３・２４日	休館	１月６・７・８日	休館
２５日（月）	９時～１７時	１月９日（火）	９時～２０時
２６日（火）	９時～１７時		
２７日（水）	９時～１７時		

１２月２８日（木）から１月４日（木）まで休館

卒業・修了予定者への貸出等について

今年度卒業・修了予定者への貸出は下記のとおりです。

貸　出：　２月２８日（水）まで

返　却：　３月　７日（水）まで

マナーを守り、みんなで気持ちよく使いましょう。

図書返却日は厳守　飲食物の持込禁止

携帯電話は使用禁止　騒がしい行為・会話は禁止

《編集後記》

なんとか冬休み前にお渡しでき、ホットしました。執筆をお願いした方々には、十分な時間が無い中、期限内に提出して頂き、本当に有り難うございました。おかげさまで、何とか間に合いました。

今回、校長先生にお願いし、「読書のすすめ」ということで投稿して頂きました。学生の皆さんの中に、自分が書いた文章を載せてもらいたい方があれば、ぜひ投稿して下さい。もちろん、先生方からのご投稿もお願いします。他の委員と相談の上ではありますが、採用させて頂きたいと考えています。

発行日：平成１８年１２月１９日
発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館　Tel：0942-35-9306　Fax：0942-35-9307
〒830-8555 久留米市小森野一丁目１番１号　E-mail：L-staff.GAD@ON.Kurume-nct.ac.jp